

調査と情報

編集・発行
 (株)農林中金総合研究所基礎研究部
 〒100-0004 東京都千代田区大手町1-8-3
 TEL. 03-3243-7331
 FAX. 03-3270-2233

今年の『経済白書』は、「新しいリスク秩序の構築に向けて」という章を設けて、日本経済の活性化をリスク秩序という視点から論じている。リスクという言葉はファイナンス理論では既に一般的であるが、最近ではリスク概念を経済の様々な側面に当てはめて議論するようになってきた。この世界には、自然災害、病気、倒産等の様々なリスクが存在しており、ある意味では、人間の歴史は、災害防止、保険、社会保障制度など、リスク回避のための様々な仕組みを形成してきた歴史であつたともいえる。しかし、『経済白書』であえてリスク秩序の再構築を提唱したのは、日本経済があまりにリスク回避的な仕組みになつてしまつたために、経済の活力が失われてしまつたという認識に基づいている。

「リスク秩序」と政府の役割

従つて黙々と生産活動を行うだけの「単なる業主」であり、政府は「危険を負担せざる企業者」であるとして、日本農業、農政の改革を主張した。確かに、行き過ぎた政府部門の拡大は、創意工夫を排除し経済の活力を削いでしまつた。しかも、政府は万能ではなく、「政府の失敗」もある。経済活性化のために政府部門の見直しをすることは必要であり、「新しいリスク秩序の構築」には理解できる部分もある。

しかし、そのことを急ぐあまり、過去の教訓に学んで築きあげてきたこれまでの制度(セーフティネット)まで全て葬り去つてしまわないよう留意する必要がある。市場に任せれば全てうまくいくというのは極めて危うい論理であり、農家が価格変動リスクに晒され経営を継続できなくては元も子もない。ある意味では、国民が政府を組織しているのは、政府が国民生活安定のため、様々なリスクを回避する機構として存在しているからであり、協同組合についても、弱小な小規模生産者・消費者が市場経済のリスクを回避するために作つて組織であるといふことができる。

こうした議論は、今世紀初頭のシュンペーターやフランク・ナイトの理論にそのルーツがある。シュンペーターは『経済発展の理論』のなかで、ワルラスの一般均衡理論に基づく静態的な均衡状態では経済は発展せず、経済の発展(動態)過程における、均衡を打ち破る企業者の役割を主張した。また、ナイトは『危険、不確実性および利潤』のなかで、企業者は不確実性に挑戦するがゆえに利潤を得ることができるとした。

こうした理論は農業についても適用することができ、東畑精一は、シュンペーターの理論を日本農業に当てはめ、日本の農民は政府の農業政策に

経済学におけるケインズ革命の意義は、市場経済の不確実性に対する政府部門の役割の主張にあつたということもでき、その観点から、最近、ケインズの初期の著作『確率論』を再検討する必要があると考えている。(主任研究員 清水徹朗)

も	「リスク秩序」と政府の役割.....1	ぶっくレビュー
く	集落営農組織の育成に法的裏付けを望む...2	『中山間の定住条件と地域政策』.....9
じ	中山間地域農業問題再考.....3~4	あぜみち.....10
	地方における中山間地域への農業支援策...5~6	虹のかけ橋.....11
	農業・福祉・交流で暮らしを創る町...7~8	統計の眼「中国の所得格差の特質」.....12
		編集後記.....12